第６回　小中一貫教育校検証部会　会議要録

開催日時		平成26年９月９日（火）　午後２時～午後４時
会　場		小中一貫教育校大泉桜学園
出席者	委　員	酒井朗　花園主計　下村恭子　金子靖子　小澤久美子 玉井弘子　冨岡弘美　小川善昭　星野哲雄　木下川肇 田頭裕　池田和彦　勝亦章行　堀田直樹　羽生慶一郎 伊藤秀樹
	事務局	統括指導主事、教育企画課
傍聴者		なし
案　件		（１）　意識調査およびヒアリング実施状況 （２）　意識調査集計結果について

１　開　会

２　あいさつ

３　案件

（１）意識調査およびヒアリング実施状況

部会長

資料２をごらんください。大泉桜学園の検証に関わる意識調査およびヒアリングの実施状況について、事務局から説明をお願いいたします。

事務局

（資料２　説明）

部会長

ヒアリングでは、かなり多くの人数の方にお話を伺っております。こういう検証の調査で、こういうヒアリングを実施することはほとんどありません。今日ご報告するようなアンケート調査での回答というのが多いのですけれども、学校運営のいろいろな側面を考える上では、実際に直にお話を伺うことが非常に大事だと思っていまして、それでかなり多くの先生方や委員の方にお話を伺うことにしています。ヒアリングについては、次回にご報告しますので、またそのときにいろいろご意見いただければと思います。

今の説明について何かご質問ございますか。

（２）意識調査集計結果について

部会長

次に案件の２、意識調査の集計結果について順次見ていきたいと思います。まず最初に事務局のほうから説明をお願いいたします。

事務局

（資料３　説明）

部会長

順番に少し数字を見ていく必要があると思います。資料３からごらんください。１枚目ですけれども、これは卒業した小学校ということで、現在の大泉桜学園は７年生の 72%が下から上がってきた子どもたち、隣の大泉学園緑小学校から進学してきた子どもたちが７年生のうちの 16%、それから他の小学校からの進学が 13%という割合で、構成されています。

あともう１つ、（参考２）のところも多分触れたほうがいいと思うのですが、大泉学園桜中学校の割合の欄ですが、経年で数字が増えていて、平成 20 年が 40.2%で平成 26 年が 64.10%となっています。この地域に住む中学校に上がる相当の年齢の子どもたちのうち、実際に入ってきた子どもたちの割合がどんどん上がっているということで、地域の子どもたち、この地区の子どもたちがより多くこの学校に進学しているということがここで見てとれると思います。

２ページに参りまして、まずこの小中一貫校としては１年生から９年生までいますので、上級生をお手本にする、あるいは上級生はお手本になるのだという自覚を持つということがあると思いますけれども、そうしたことについて各学年ごとに聞いています。下級生が上級生を手本にしたり、上級生が下級生の手本になることについて、おおむね８割の児童生徒が自覚しています。６年生にとっては下級生の手本となる意識、７年生にとっては上級生を手本とする意識について、ちょっとそこが少し数字が低いものですから、考察することも必要だということが書いてあります。

３ページ目ですが、運動会は特に上級生が目標になる、お手本になるという機会になると思いますので、そうした際に下級生は上級生をお手本にしようとしているか、あるいは上級生は下級生のお手本になることを意識しているかという質問をしています。下級生は上級生をお手本にしようとしていて、上級生は下級生の手本となるという意識が非常に高く、どの学年でも８割の児童生徒がそのように思っていると答えています。

４ページ目ですが、次はさくら祭です。さくら祭で同じように上級生がお手本として見えているかどうかということです。これについても全体的には８割の生徒が自覚しているということになっています。５年生から７年生では若干低くなっています。

５ページは、小学校の学年の生徒は中学校の学年の先生と話をすることがあるか。逆に中学校の生徒には、小学６年生以下の先生と話をすることがあるかということを聞いたものです。これを見ますと、一体の学校の中で小学校、中学校区別なくいろいろな先生と子どもたちがかかわっている様子がわかります。特に５年生と７年生の回答が高く、まさに５年生が西校舎に移ってきているといったことの効果が見てとれるかなと思います。７年生は逆に小学校の先生と顔見知りで、日常的にいろいろなところで顔を合わせる機会があるということになります。

６枚目ですが、次は児童生徒同士で話をすることがあるかということで、小学６年生までの児童には、７年生～９年生までの生徒と話をすることがあるかどうか。７年生～９年生には、６年生以下の下級生と話をすることがあるかどうかを聞いています。これも６割以上の子どもたちが、中学校、小学校の関係を超えて何らかの交流を持っていると回答しています。特に見ていただきたいのは５年生です。それから７年生が非常に高くなっていて、そういう交流が非常に活発なことがわかると思います。

次は、子どもたちの中でのリーダーという問題を尋ねています。１期の４年生まで東校舎で過ごしますので、４年生が東校舎のリーダーになります。３年生・４年生には、４年生での東校舎でのリーダーとして頑張りたいと思うかを聞いています。５年生・６年生には、４年生のときに東校舎のリーダーとなったことが西校舎に移ってからの生活に役立っていると思うか。それから７年生～９年生も同じように、そうした経験が役立っているかどうかを聞いています。７年生は、一貫校になることを経験しています。これを見ますと、３年生・４年生は頑張りたいという気持ちが非常に高く出ているということがわかります。それから５年生・６年生もかなり高くなって、７年生も半数以上の児童生徒は非常に肯定的に受けとめているということで、そうした期の分かれ目での４年生のリーダーというのが子どもたちにとって非常に好意的に受け取られている。やる気を持たせているということがわかると思います。

８ページは、学校生活で５年生・６年生のことを聞いています。５年生・６年生はこの学校では７年生から上の生徒と一緒に西校舎で生活をします。そのことについて３年生・４年生には、西校舎で学校生活を送りたいかどうか、５年生・６年生には、西校舎に上級生と一緒にいることについての感想、７年生～９年生については、５年生・６年生が西校舎で上級生と一緒に学校生活を送ることはよいことかどうかを聞いています。６年生までは８割、それから７年生・８年生は約６割の児童生徒が西校舎での学校生活に期待と意識を感じています。９年生については若干回答が低いということですが、開校１年目に西校舎で学校生活を始めた際の６年生であったことが影響している可能性も考えられるのではないかという考察をされています。それを除くと、５年生・６年生が西校舎に移って中学生と同じ校舎で生活することについて、子どもたちからもかなり肯定的な回答が出ているということがわかります。

９ページ目が交流給食についてです。この学校では学年間の給食を何回か持っていますが、そのことについての質問です。３年生・４年生は、上級生と食事をして楽しいか。５年生・６年生は、他の学年の人と食べると楽しいか。７年生～９年生も同じような聞き方をしています。これを見ると、３年生～５年生の評価が非常に高いですね。下の子が上のお兄さん、お姉さんと一緒に給食を食べるということについて非常に高い肯定的な答えが集まっています。それより上の学年も楽しいというふうに思っている子どもたちのほうが多く、交流給食もおおむね肯定的な評価が出ていると思います。

リーダー、運動会、あるいは担当の先生との交流等について、この学校ならではの取組についての子どもたちの感想を見ていただきましたが、ここまでで何か、ご感想とかご質問とかをお願いしたいと思います。

５年生・６年生が上級生と西校舎で過ごすことについて、子どもたち自身がかなり肯定的な回答が多くなっています。それはこの学校での子どもたちは皆そう思っているということで、この一貫校の実践を子どもたちが非常に好意的に受けとめているという１つのあかしではないかなと思います。５年生だったらむしろ小学校のほうにいたいと思うのかなと思っていたので

すけれども、むしろ５年生のほうが６年生よりも、西校舎で生活を送ることを、よいことだというふうに思っていまして、あ、そうなんだというふうに思いました。ほかのところでも結構ですので、少しご質問とかご感想とかいただければと思います。

事務局から少し補足がありますか。

事務局

９ページの資料のデータの中で７年生・８年生で「わからない」という数値が非常に高く出ております。これは個々の回答を確認したのところ、緑小学校やほかの学校から来た子たちが、交流給食の経験がまだないというような子も含まれていて、そういう意味で「わからない」という数字が高くなっている可能性があります。

部会長

このアンケートをとったときにはまだ交流給食を経験していないということですね。全体には子どもたちは上級生との交流を非常に楽しみにしていたり、あるいは４年生でもリーダーというのがこの学校の１つの大きな特色ですけれども、それについて特に３年生・４年生はすごく意欲的で、特に４年生はほぼ全員が頑張りたいと思うと答えていて、これはなかなかすごいことだなと思います。

委員

もう卒業された９年生と１年生の交流給食を見たのですが、身長の差が大変あって、踏みつぶしちゃうくらいの小さな子どもたちと一緒に給食をとるのは恥ずかしそう、というのが９年生の感想ではないかなと思います。

今年度の運動会の際に、９年生が１年生と２年生の子どもたちをトイレに連れて行ったり、炎天下の中でしたのでミストを何カ所か設置したんですが、そこに定期的に連れて行く姿をよく見ました。そういうところを見ると、運動会を通して９年生の意識もちょっと変わっているのではないかと思っております。ことしの９年生はよくやってくれているなと思うところです。

今年の６年生については、ちょうど４年生が東校舎のリーダーというのが軌道に乗ってきたときに４年生を経験しています。いつも生き生きと学校に通って、委員会活動も委員長まで任されるような学年でしたので、すごく意欲的に取り組んでいたというのが印象的でした。それを見ている下の子たちもまた、４年生になったらそうなるのだという意識は高いのはすごく感じます。５年生までは多分、去年まで楽しかったイメージのまま来られると思います。また、何となく中だるみというか７年生になると防災リーダーが今度、役として回ってくるのですけれども、そこまでの１年間が中だるみをしているというのが、このアンケートで見てもすごくわかります。

これからさくら祭もありますので、子どもたちももっと視野が広くなって、運動会のときよりも１年生も２年生も３年生ももっと視野が広くなって、上の子たちを見ようという意識も変わってくると思いますし、また９年生も卒業に向けてもうちょっとというところで、この学校に長くいたという経験もあるし、下の子たちに一生懸命いろいろなことを教えていこうという意識も高まっていくのではないかなと思っています。

部会長

４年生で１つ区切れるので、４年生は非常にやる気を持っていくんですね。その後西校舎に移って５年生から７年生で７年生がリーダーになるので、６年生はその前になるということで、そこが課題になりますね。ほかの学校では６年生が児童会の委員長なのですけれども、そういう役回りがここでは４年生と７年生のところで分けたので、そこの期の分け方でやはり子どもの意識が変わってくるということですね。

10 ページ目で集団下校訓練のことについて尋ねています。避難時に上級生と一緒で、下の子からすると安心して下校できるか、逆に上級生はしっかり下級生のことを見守れるかどうか、そういうことについて聞いています。

５年生以上については下級生の世話をするという観点での質問になっています。５年生は中間なのでどっちに入れるかというのがあるのですが、ここではどちらかというと世話をする役として聞いています。５年生と７年生の世話をしようという気持ちが非常に高いです。９年生が若干低いということがあるのですが、全体として６割以上の肯定的回答が得られているということで、意欲的に取り組めていると言えそうです。

11 ページが期ごとの朝礼や行事について聞いています。１期、２期、３期の期別の朝礼というのがありまして、そういうことに積極的に参加しているかということです。これも全体に非常に高い肯定的回答がありまして、９年生が若干、肯定的な回答が低いということです。これはどうしてかということについてさらに検討する必要があると書いてありますが、こういうような傾向が見られるということです。

13 と 14 はちょっと難しいのですけれども、あなたにとって中学校に進学することで楽しみなことは何ですかということで、勉強や部活や友達関係、そうしたことについて聞いています。７年生～９年生は前を振り返って、中学校に進学するときに何が楽しみでしたかと聞いています。グラフを各学年ごとに見ていただきますと、部活動のところと友達関係のところがほかから抜きんでて多いことがわかります。やはり中学校というと部活、それから友達同士の関係ということについて、期待していることがわかります。

14 ページ目は逆に、進学することの不安について聞いています。３年生・４年生、５年生・６年生は、進学することへの不安に思うことを全部、丸をつけてもらってもいいという質問です。７～９年生は、不安に思ったことは何でしたかという形で聞いています。子どもたちにとっての不安が一番多いのは、勉強が難しくなることが挙げられています。逆に先生がかわることへの不安ですが、３年生はかなりありますが、ここはちょっと大事なんですけれども、実は５年生・６年生はかなり低くなっています。西校舎に移って、中学校の先生がわかるようになる。直接会う機会が増えるようになって、そうした不安が低くなってくるということがあります。小中連携の調査をすると、５年生・６年生は教科担任制になるということで、先生の問題は結構大きいことが多いのですけれども、ここでは先生についての不安は、５年生・６年生は低くなっています。これはかなりの特徴だと思います。勉強のところの不安が、逆にそれだけが目立って多くなるという形になっています。

その次は、進学することへの楽しみということで期待感を聞いています。帯グラフを見ていただきますと３・４・５年生は高いですが、逆に６年生が低くなっています。もう進学してしまった子どもたちは進学したとき楽しみだったという子どもが多いので、まさに進学しようとする６年生がちょっと不安にかられているのではないかというのが事務局の考察になっていま

す。

15 ページ目です。これは大泉桜学園の教育目標である「桜学精神」を大切に学校生活を過ごしていますかという質問です。これについてはおおむね肯定的な回答があります。学年が上がるにつれて肯定的な回答は低下していますが、高学年では深く考えて理解する傾向にあることを踏まえると、９年生でも５割以上は肯定的に回答していて、こうした目標と指針に対する理解は進んでいるのではないかというのが、事務局の解釈になっています。

次は自己肯定感を聞いているのですが、学校以外の場所でも自分の力を発揮しようと思いますかということです。これは５年生以上しか聞いていませんけれども、どの学年でも非常に高い回答が出ています。

17 番は、大泉桜学園で学んだことをもとに、自分の力を信じて努力し続けようと思うか聞いたところ、肯定的な回答が非常に高くなっています。８年生では肯定的回答が 100 近くになっています。ほぼ全員がそのように感じているということで、ここは非常に高いですね。

ここまでが児童生徒のアンケートになります。ご感想なり、ご意見があればいただきたいのですけれども、いかがでしょうか。

部会長

私から感想を申し上げますと、心理的な自信とか、努力したいとかいうところは高くなっています。資料の４「学校生活満足度調査の結果」を見ていただきたいのですけど、これはいわゆるＱ－Ｕ（キューユー）と呼ばれる子どもたちの意識の調査の結果です。子どもたちの心理的な安定とか、人間関係のよさということが出ていまして、どちらでも子どもたちは意欲的に学校生活に取組、自分に自信を持っている様子が出ているのが全体的な傾向です。

ご意見等があればお願いします。

委員

中学校に進学することが楽しみなのかという設問に対して、６年生全体としては楽しみにしているお子さんが半分、どちらとも言えないというお子さんがその残りの中で多いという結果になっています。

現在、中学校の部活動に５年生から参加することができます。現在の５年生のお子さんの部活動の参加率は高いのですが、６年生の参加率はそんなに高くないということを聞いています。５年生のお子さんは部活動を通して密にかかわることがあるので、先輩を見て、こういう先輩になりたいという像がはっきりしているのではないかと思います。６年生は部活動に参加していないので。校舎は同じとはいっても１階と３階が中学生で、２階に５・６年生が入っていて、フロアが違うので、あまり交流することもないのかなという印象です。

部会長

５年生と６年生では部活の参加がかなり違うということもありますね。

委員

５年生のお母様たちが「ことしの５年生はやる気が違うよ」とおっしゃっていたのをすごく印象深く思いました。

委員

１ページの（参考２）のところで、学齢簿数に対する入学者数の割合が 22 年度まで 44%台で推移していたのが、一貫校で 63%で急にはね上がって、その水準が変わらずにいるということが目につきました。

それはそれなりに受け入れられていると考えていいのでしょうか。

部会長

そうだと思います。

委員

６年生から中学校に進学する割合が多いということは、これだけ見ると「あ、そうですか」で終わってしまうんですけれども。ほかの学校ではどういうふうになっているのか、小中一貫教育校になっていることによって、そういった違いもあるのかないのかは、これでは見ることができません。幾つか比較ができるとよいか思いました。

交流給食とか集団下校は、９学年全部一斉に行なわれているというふうに解釈していいのか、頻度はどうか、コメントがあると比較的読みやすいと感じました。期別朝礼はどうやってやられているのかなどの説明があるといいと思います。

部会長

これだけだとわからないということですよね。

ほかの学校の子どもたちとどう違うのかというのは、なかなかアンケートではとれません。比較の中で考えていくというのが本当は必要なんですけれども、今回はこの学校の検証ということで、この学校だけでアンケートをとった関係でそれだけの数字になっています。

委員

設問が多岐に渡っているので、全部をやる必要はないと思います。いくつかだけでも比較できるといいと思います。今の７年から９年生、17 番の回答も非常に高いと思うので、そういうところとの比較も加えて考えられるといいような気がいたしました。

部会長

何か比較できるデータがどこかにあれば、それと比較するようなこともできるかもしれません。

国の学級調査などでも、何か近い項目があれば比較できるのではないでしょうか。

似たような調査があるような気がしますので、ちょっと探してみたいと思います。それとの比較でその子たちの意思の傾向がわかればいいですよね。

ご指摘いただいたように、この学校に進学する生徒が、23 年度から上がっていまして、そこからは大体一定しているのですけれども、地区の３分の２ぐらいの子どもたちは、この学校に進学しているということになります。それはこの小中一貫教育校の設置による大きな影響、変化だと思います。

委員

ほかの学校、一般的な練馬の学校はどうでしょうか。

この 64%というのが高いのか低いのか。

事務局

地域性の関係もありますし、単純に数字の比較というのは難しいかなとは感じております。だから検証の中で必要な比較ができるのであれば、それも１つの方法だと思います。

委員

練馬区全体の平均と比べてどうかということでもいいと思います。

部会長

そうですね、ここは比べることはできます。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。よろしくお願いします。

委員

質問項目の５番で、先生と子どもたちの会話の関係が示されていますけれども、すごく有意義なことであるし、この数字は大事にしていただければいいなと思いました。また、14 の項目の不安のところでは、不安視している子どもの数というのが、先生がかわるということで非常に少ない印象を受けました。日常的に先生の顔を見て、正直に言うことが、中学校に向けて、教員の面から言うと非常にうまく適応できていると思います。小学生と中学校の先生は非常に怖いイメージを持っていて、そういう数字のデータも確かに出ていると思うのですけれども、先ほどあったように６年生、５年生というのは、とても低いなというふうに思いました。

部会長

本当にそうですね。やはり中学校の先生を小学校のうちから間近に見て、あるいは教えてもらったり、学校行事等で直接接する機会、部活でも接しますし、そういう機会が非常に多いので、本当にそこに、その段差は非常に低いと思います。

恐らく似たような調査があると思いますので、それとの比較の中でこの学校の子どもたちの特徴、不安感の傾向が対比できればいいかなと思います。

次に今回のアンケート調査の後半になりますけれども、先生方へのアンケート、それから保護者の方へのアンケート、それから学校関係者、地域の方ですとか、さまざまな、この学校にかかわってくださっている方々のアンケートをまとめたものがございます。18 ページからですね。「保護者」と書いてあるのは保護者だけのアンケート、それから２は「教員」、これは先生方へのアンケートといふうになります。それから４番は「学校関係者」のアンケートになります。

20 ページの５番をご覧ください。さまざまなお立場の方から見て、大泉桜学園で１年生から９年生まで見通した指導と見守りに努めていると思いますかということで聞いています。これは８割を超える方が、どのお立場の方でもそのようにお感じになっているという答えが出ています。

６番は、小学校籍の先生方と中学校籍の先生方が協力して子どもたちの指導に努めているかどうかということです。これについても非常に高い割合で肯定的な回答が出ています。若干、保護者の方の肯定的回答が低いということも触れていますが、７割を超えていますのでそんなに低い値でもないと思います。

22 ページの７番、先生方のかかわりです。さまざまなお立場の方が皆さんとも、小学校の先生と中学校の先生が協力して指導に当たることは、子どもたちの生活の安定につながっているというふうに感じたということが見てとれます。

次に８番、23 ページで、これは４年生のリーダーについての感想です。これも一定の学年の保護者の方、あるいは先生方、学校関係者の方々いずれも非常に肯定的な回答が出ています。保護者の方は８年生がちょっと低いですかね。

24 ページ９番目です。大泉桜学園は５・６年生が活躍する機会を工夫していると思いますかという設問です。先ほども話題に出た５年生、特に６年生かもしれませんが、ちょっと低い値でして、１つの課題になると思います。５年生・６年生の活躍する機会の工夫について、教員、保護者とも肯定的な回答が５割に達していません。５年生・６年生の活躍の機会について、工夫や検討と、さらなる理解が必要ではないかという事務局からのコメントになっています。

25 ページ、50 分授業についての感想です。５年生・６年生は通常は 45 分の授業ですが、この学校では 50 分になっています。これについては保護者、学校関係者の方々の７割以上が肯定的です。先生方の間では若干この割合が低くて、55%が肯定的で 34.5%は否定的ということで、50 分授業の効果について、ここでは「他の資料も含めて検討する必要がある」というまとめ方をしています。

次は５年生からの一部担任制になります。これについては保護者、学校関係者とも 9 割近い肯定的回答です。先生方の間でも一部担任制は非常に好意的に受けとめられていることがわかります。

12 番が学習指導についてですが、１年生から９年生までを見通した学習指導を行なうように努めていると思いますかということで、これもおおむね肯定的な回答です。学校関係者８割以上、保護者・教職員は６割以上から肯定的な回答を得ています。学習指導については区の研究指定校ということで研究に取り組んで学習指導の充実を図っていることもあわせて書かれています。

次は学習評価になります。学習評価についてはちょっと意見が割れます。先生方への質問と保護者の方への質問はかなり違う質問で、これを比べるのはちょっと無理があるかなとは思うのですが、保護者の方からは、多くの方が７年生になったときに教科の評価や評定の仕組みが変わることについて理解できたという回答が得られています。先生方の回答は、肯定的な回答が５割ということで、このことについては半々になっています。ちょっと難しいかもしれませんが評価について、どう連携していくのかということが１つの課題かなということです。。

ここまでで一度、切らさせていただいて、ご感想等をいただければと思います。いかがでしょうか。

委員

転勤というか異動してきた先生は、この違いになじむのに時間はかかったりしますか。

事務局

最近来られた先生がこの学校の仕組みを十分理解したなと実感するのに、およそ入って１年はかかったというふうにおっしゃる方もいました。ただ、それが全てではないと思います。学校のいろいろな動きを１年間経験して、理解する部分というのはあると思いますが、その辺は教員としてはどの学校に異動しても起こり得る話です。この部分については校長先生のお話も必要かなと思いますが、いかがでしょうか。

委員

学校になじむというのはやはり大変難しいというか、どう評価するというのは、なかなか難しいと思います。小中一貫教育校で朝礼でも全校児童生徒ですから、特に中学校籍の教員のほうが、違和感は感じると思います。それは運動会も同じだと思います。特に卒業式は当該学年に対する思いというのがそれぞれありますから、６年生と９年生を合同でやるとなれば、これまでもなれ親しんでいるものがありますから、本校が今やっているものについては、それなりの違和感があって当然だと思います。

ただ、新しい学校づくりということで皆さん意欲的に取り組んでいると思っています。例えば学年のとりまとめを行なうような学年主任の先生方も、子どもが増えていたからそういう職に就くということではなくて、短期間でそういうとりまとめ役の職でリーダーシップを発揮していただくというようなこともあるので、そういうことをトータルすると、評価というか論評するのは難しいですけれども、私としては、今、説明にしたような言い方になってしまいます。

部会長

どこの学校に入っても、その学校のやり方があるわけで、やはりそれになれるのにしばらく時間がかかる。ここは小中一貫で、いろいろな独自のところがありますから、その部分になれる時間は多少かかりますけれども、こういう新しい取組ということで皆さん頑張っていらっしゃると、自分もヒアリングをしてそういう印象を持ちました。

委員

環境の変化という点では一貫校以外の異動とさほど変わらない感じなんですね。

委員

学校のそういうシステムよりは職員室の人間関係のほうが、やはり大きいのかなと私は思います。困難な課題、新たな課題というのは日々出てきますよね。それはどんなところでも似た傾向があって、それを小中一貫だからそうなのだというふうに思うかどうかは別の話ですけれども、職員室で人間関係が良好で、同じ方向に向いてやっているなという気持ちがあれば先生も仕事は頑張れるし、充実して取り組める。働く人間の環境づくりという意味では、むしろそっちのほうが私は小中一貫よりも重要かなと思います。

部会長

次回、ヒアリングの報告をしますが、そこでもう少しいろいろなお話ができると思います。先生方の現況での職員間の関係も非常に良好だという印象をヒアリングで受けておりまして、

それはやはり新しく入ってきた先生方が、その中でなじんで取り組めるようになっている１つの大きな基盤かなと思います。
　ほかにはいかがでしょうか。

委員
　今の学校関係者、保護者、教員でお話ししていますが、学校関係者の意見というのはほとんどトップクラスで各項目いいと思います。
　というのは、回答する気持ちの中にこうなってほしい、こうなれば学校はいいのではないか、子どもたちもこういうふうにしてもらえればいいのではないかという期待があるからなのではないでしょうか。我々はその実際の内容はわからないのです。低学年のお子さんを高学年の先生が見ているとかなんとか、そういうふうにしてくれれば、学校内での一体感は生まれますよね。だから、期待を込めてという人が多いのではないかと思います。実際に、内容まではわからないので、子どもたちのために学校のためにこういうふうにしてもらえれば、ああいうふうにしてもらえば、よくなるではないかというので、みんな考えるのではないかなと思います。

部会長
　まさに、激励の声ですよね。こうやってよく評価してくださろうというお気持ちが非常に強いことがよくわかります。
　内部のことはなかなかわからない部分がありますよね。

事務局
　今のご意見についですけども、学校がどのくらい地域に期待されているか、その期待度というのも大事な要素なのかなと感じます。何かしらの形でこの検証のデータとして、今のご意見の視点も反映できないかなとは思っております。これも検討していただきたいと思います。

委員
　全体的に見て非常にここの生徒さんは品行方正、真面目で優しく優秀だと思います。学力はわからないですけれども。ただ、我々の感覚からすると、中学生ぐらいになったらどこの学校でもちょっとやんちゃな子とかいろいろいますよね。そういうことはないのですか。
　昔の中学生には、ある程度そういう子どもも何人かはいたと思いますが、グループというか。

委員
　練馬だけではなく恐らく全国的にそういう傾向は薄まってきていると思います。言い切るだけのデータを持ち合わせているわけではないですけれども、こういう仕事を通して、よその学校とか、他の区市町さんとかにも出向く機会があって、全体的にはそれは少なくなっていると私は思っています。ただし、個々人のメンタリティの面では、これまでにはないそういうお子さんたちの課題が発生しているということは恐らく間違いないでしょうね。我々のときは単純だからすぐに表に出るけれども、今はなかなか外に出てこない時代ですから。
　そういうこともあって、本校ではＱ－Ｕテストをやっています。これは子どもたち個々の人間関係とかうれしさとか、そういうものはかなり正確に出てきます。もちろん子どもたちに寄

り添って見ていく中での教師の直感もすごく、絶対大事だけれども、それを裏づけるものとして意識調査をして、子どもたちと教員がチームとなって支えていくということが非常に重要になってきていると思いますね。

委員

区立中学ですから学校にケータイとか、スマホとかは持ってきちゃいけないわけですよね。ただ、自宅に帰れば多分、どのくらいの割合かはわからないですけれども大多数が持っていると思うのですけれども。所有率は学校ではわからないですよね。

委員

所有率がどのぐらいなのかということはわかりません。

委員

所有率だけでなく、どのように使っているか。ＬＩＮＥとかいろいろな問題がありますよね。

委員

実は今月、９月号の「学校だより」でも、スマホなどの情報機器を持つことの功罪というか、明暗ということでちょっと触れています。ある意味相当、学校の中でも危機感を持っています。所有率が多いか少ないかというより、扱い方が十分でないがためにトラブルが発生したり、一度発生すれば関係を修復するのはなかなか難しかったりします。そういう点では非常に危機感を持って、予防を最大限の重点にしてやっています。ただ、なかなか見えないというところがさらに問題を難しくしていると思います。

委員

家庭の問題が相当ありますしね。

委員

ずっとこれ見させていただいて、私も毎回こういう話になるとお話しさせていただくのですが、一貫校になるときの見学も足立のほうに行かせていただいて、学校関係者がいなくなった後、ＰＴＡの人ともちょうど話す機会があって、やはり３年目が一番心配だということを聞きました。その学校では３年目でものすごく生徒が減ったということでした。だから、ずっと心配していました。今回は小中一貫校の検証で、よその学校との比較の検証じゃなくて、この学校に対してどうですかという質問だろうから、きっとほかの方法かなと思っています。初めてやってみて、この学校に対してどうですかという話だとは、解釈しています。

私の小中学校時代を振り返ると、やはり中学生がすごく怖かった。一貫校になったときに小学生と中学生が悪い友達になることがすごく心配でした。そういう子が一緒に友達になるのが怖かった、心配だった。でも、アンケート結果を見ると、みんなが目を通すようになっているからいいのかなと思って、そういうような面でほっとしているところがあります。

悪い心配はずっと目を通してきたから小さいときからわかるのだけれども、いいことは全然わからない。これを見させていただいた限りでは、学校でも皆さん、それぞれの先生が一貫校

になって、随分一生懸命努力しているのかなと思います。先ほど授業時間 50 分に対して新しい先生が反対したといわれたけれども、新しい先生が反対しただけで、30%も 35%にはならないと思います。多分、そればっかりではないと思うので、また何か考えていくことがあるかなと思います。

部会長

確かにそうですね。本当にいろいろなことがこの数字から見えてきます。

あと少し残っています。29 にページになります。卒業式と入学式のことについて聞いています。入学式を１・４・７・９、卒業式を５・６・８・９が一緒に行なうことについて、よいことと思うかどうかを聞いています。これは学校関係者の方・先生方は肯定的な回答が低く、５割、逆に保護者の方は６割以上の方が肯定的な回答で、肯定的な割合が高くなっています。

15 番は運動会や音楽会を一緒にやることについて、少なくとも７割以上の方が合同での運動会、さくら祭を行うことは皆さんいいことだと思っていらっしゃるということでした。

それから 16 番ですね、交流給食についてです。交流給食についてはほとんどの方が肯定的にお感じになっていらっしゃるということでした。

17 番に参ります。５年生・６年生が７年生の学年と同じ学校内生活している、交流しているということは子どもの人間性や社会性の育成につながると思うかということで、いいことだという肯定的な回答が多くなっています。

18 番は、児童会と生徒会が一緒に活動することを先生方だけに聞いています。通常でしたら児童会は小学校で６年生まで、生徒会は中学生だけですが、ここは５年生から児童生徒会で皆さん一緒、子どもたちが一緒にやっている。そういう活動がいいことかどうかということで、これは肯定的回答が非常に高いですね。

19 番は、大泉桜学園の中学校に入学する子どもは、できるだけ大泉桜学園の小学校から通学したほうがいいと思いますかということで、下から上がってくるほうがいいのだというふうにお考えの先生方は半分弱です。逆に言いますと、それ以外の方は緑小も含めていろいろな学校から来ての７年生という形がいいのではないかとお感じだと思います。

次に 20 番、７年生の問題ですね。大泉桜学園以外の小学校から７年生に入学した生徒は、大泉桜学園の小学校から入学した生徒と比べて学校になれるのに時間がかかると思うという方は全体的には低くなっています。５年生と７年生の保護者の方に若干そういう、時間がかかるかなというふうに思っていらっしゃる方がいらっしゃいますが、それでも３割ぐらいですか、それほど多くないですね。

21 番も先生方だけに質問したものです。大泉桜学園以外の小学校から７年生に入学した生徒の保護者は、大泉桜学園の小学校から入学した保護者と比べて、学校の方針や教育活動を理解したり不安を解消したりするのに時間が多くかかると思うかということで、これは「そう思わない」と回答された先生のほうがかなり多くなっています。「そう思う」「大体そう思う」という方は 13%程度になっています。

次が全体に聞いた質問で、７年生になる際に学校選択の選択肢が用意されていることはいいことだと思うかどうかという質問には、ほとんどの方が、いいことだとかいとうしています。

22 番、保護者の方に対して、１年生～６年生の保護者と７年生～９年生の保護者同士の交流や連携の機会の方法は十分ですかと聞いたところ、交流については十分だというご回答は少な

い状況でした。

次に23番、１年生～６年生の保護者と７年生～９年生の保護者同士の交流や連携を図ることは、保護者の不安解消に役立っていると思うかということについては、全体的に肯定的な回答は４割程度、その連携が不安の解消に役立つという方が４割程度です。もともとは交流が少ないという評価なので、ちょっとこれは回答しづらかったのではないかと思いますが、５年生、７年生の保護者では高くなっています。

最後は24番。学校関係者の方に、大泉学園の小中一貫校としての教育活動の内容や成果を地域に対して十分に発信しているかということで、「そう思う」「大体そう思う」と回答してくださった方が７割を超えているという結果になっています。

ちょっと急いでしまいましたが、小と中の保護者の連携がちょっと低いということが課題になっているかなというのが印象です。ここまででいかがでしょうか。

委員

29ページの入学式のところですけれども、肯定的な意見が低く、それ以外のところで例えば運動会のところなんか肯定的な意見が多くなっています。

これは回答者していただいた皆さん誠実にアンケートに答えていただけたなと感じています。全般を通して、ある一定方向きちんと出ているなというのが、今日、この資料を拝見して、全体の印象として思いました。その上で、この入学式はなぜ肯定的な割合が低く出るのかなという原因ですが、例えば体育館のキャパシティの問題があって、全校児童生徒は参加できないんですよ。中学校籍の教員だと、相当な大規模校でも中１、中２、中３と３学年が大体おさまって、全校で卒業式とか入学式を大体行うことができるけれども、大泉桜学園では、それができなくなってしまう。小学校の先生たちにとっては、１年生がかわいらしく入ってきて２年生が合唱とか器楽演奏で歓迎の意をあらわすようにやるとかいうのが定着していますから、確かに課題としてはあります。だからといってそのようにできるかどうかというのは別の問題で、小中一貫教育としての理念をきちんとやっていくという点では全てゼロベースで物事を考えていかないと新しいものは生まれません。評価は評価できちっと私たちも分析をして、より解決をしていきたいと思います。そういった点では数値としては、正直に出ているかなというふうに思います。

先ほどの期待値というのはあるけれども。数値としてもよく出ていると思いました。

部会長

本当にそうですね。運動会や音楽祭は全体でやることに非常に肯定的で、これも大事な結果だと思いました。

ほかにいかがでしょうか。

委員

私は他校のＰＴＡ会長をやっていますが、中学校のＰＴＡの会長さんが誰というぐらいまではわかっているけれども、役員さんとかそういう人たちとそんなに話したことあるかと言われるとそんなではない。そういうところから見れば、大泉桜学園に関しては、ＰＴＡの連携というのは、はるかにとれていそうな気がしているのです。連携がとれていないというデータになっ

ているみたいなんですけれども、そんなことはないのかなという気はしています。
戻してしまって申しわけないですけれども、50 分授業のところですが、これに関して小Ｐ連としては、学校生活支援員の増員を区に要望しています。
支援員を欲しいと思っている先生としては、やはり５分延びるというのは結構長いのかなと思います。楽しくやれていますよという先生に関しては、５分ぐらい延びてもそんなに気にならないと思いますが。生活支援員が必要だなと思っているクラスにとってはすごくしんどい５分になるのかなと思います。だから先生は 50%前後に対して、保護者はそんなにしんどいかどうかというのはわからないので、先生と保護者のギャップがそこで生まれているのかなと思いました。

部会長
実際に授業をされている方と保護者の方とでやはり意見が違うということですね。
ほかにいかがですか。

委員
アンケートは、中学の近隣から入ってきた子のことだったと思うのですけれども、逆に大泉桜学園から近隣の中学に入っていった子がそこの中学で、ほかの小学校から来た子と何か違いがあるかどうか。何か顕著に違いが出ているとわかりやすいなと思いました。
大泉桜学園以外の小学校とは違う経験をして入ってきているわけなので、入学当初は多少違うのかなと思うのですが。
部活を経験して上がってくるとか、50 分授業をしてやってくるので、ほかの緑小とか大一小とかから来た子とはやはり違う経験をして上がってきているので、アンケートではわかることではないのですけれども、ただちょっと何か違うかなと思うのですが。

委員
その辺についてのデータをとっていません。
推測なりますけれども、最近の傾向としては、全てではありませんが部活動関係とかで明確な意思を持って本校の６年生から、特に公立の近隣の中学校に行くということは何人かいるかなと思います。卒業後、ちょこちょこといろいろな部活の大会とかでも拝見するけれども、元気そうに続けているから恐らくそれはあまり関係ないかなと思います。

委員
全員把握しているわけではないのですが、見たところでは割とリーダーシップをとっている子が多いかなと思います。

委員
母校であるこちらにＳＯＳが来るということは皆無です。７年生に本校に入学してリーダーシップをとって、学年の中でリーダーシップをとっているお子さんも少なからずいますから、そう考えると同じかなと思います。

委員

教員で一まとめでやっていますけれども、小中で意識の違いがもしかしたらあるのかなと思いました。違いがないんだったらいいですけれども。

学年別を見ると、なぜか不思議なことに８年生のところで比較的低いんですよ。何か理由がもしかしたらあるのでしょうか。

事務局

冒頭申し上げましたけれども、それぞれの学年の児童生徒の開校時から現在に至るまでの事情は１年生から９年生までそれぞれ違うということがこの意識調査の前提にあります。その辺を加味しながら協議をしていただきたいというところと関連するかもしれないというところでありますが、確たるものとして現在のところはお話しできることはありません。

部会長

８年生は５年生のときに小中一貫教育校になっています。ですから一番、変化の大きかった学年だと思います。最初に小学校に入った段階では保護者の方はその学校がどういうふうに変わるのか、それほどイメージがなく、５年生になったときに大きく西校舎に移動して 50 分でというところから始まったという、その学年ですね。それがどういう意味を持つのかは検証しなければいけませんけれども、小中一貫教育が当たり前という形で１年生から入ってこられた方が全てを占めるようになりますと、多分また学校に対する保護者の考え方も随分変わってくるかなと思います。

最後に資料４を紹介させていただきたいと思います。資料４は学校のほうで学級経営に資するということで学校生活満足度調査、俗にＱ－Ｕ（キューユー）という調査で、いろいろな学校でこの調査をしています。通常は学級全体の生徒の様子を把握するための調査ですが、今回は検証に参考にするためにこのアンケート調査と同じような使い方で、個々の生徒がどういう傾向を持っているのかというのを見るために再分析しました。

ちょっと事務局から最初、説明をお願いします。

事務局

学校生活満足度調査の中からこの検証に必要な質問を選んでいただき、６問について経年比較で分析いただきました。平成 24 年６月、平成 25 年２月、平成 25 年６月、平成 26 年２月に同じ質問を重ねております。２ページ目以降に個々の質問の集計が出ておりますけれども、同じ質問について同じ児童生徒の学年集団がどのように回答が変わってきたかというその経年の比較。それから年度は違うけれども例えば同じ６年生同士、そういう比較をしたのが②のところになります。①は集団は同じ、そして学年が１個下。②の分析につきましては学年は同じ、でも集団は違う。年度が違うという、そういう比較を各質問でしていただきました。その結果一定の傾向が読み取れたということであります。

部会長

私のほうから説明させていただきます。時間の関係で１番のグラフのほうだけ、今日は見ていただきたいと思います。４ページをごらんください。これは友達関係についての質問です。

「あなたは、友達にいやなことを言われたことがありますか」という質問です。これについてこの学校では、６月にとって２月にとって、また次の年の６月にとって２月にとって、毎年調査を行っています。今の中学１年の子たちが５年生のときの春からどういうふうにこの回答が変わっていったのかをずっと追跡してみたものです。そうしますと、友達から嫌なことを言われたというのが５年生から６年生とどんどん下がっていて、同様に平成 24 年度の６年生の学年も下がっている。さらに平成 24 年度の７年生の学年もやはり下がっているということで、どんどん友達関係でいえばよくなっているということがわかるグラフになっています。

そういうように見ていただきますと、２ページからざっと紹介しますと、まず挨拶や返事をしていますかという設問はおしなべて高い値で一定しています。子どもたちが成長していく中で、挨拶や返事は最初から比較的皆さんよくできるということがずっと続いている。３ページの楽しく遊んだり学習したりしていますかというのも、学年ごとにちょっとずつ違いますが、おおむね楽しく遊んで学習したりできるという子どもたちが多いです。それで先ほどの４ページが、友達に嫌なことを言われたというのはどんどん低くなっていく傾向があります。

それから仲間外れにされたというのも学年進行で減っている傾向があります。その次６ページですね、クラスに気持ちがわかってくれる人がいるというのは逆に、若干ですが上がっているという傾向があります。これも友達関係が徐々によくなっていることが見てとれるかなと思います。それから７ページ目、（６）ですね。何かしようとするとき、クラスの人たちは協力してくれたり応援してくれたりすると思いますかという質問ですが、これも全体的には肯定的に変化しています。５年生から６年生、６年生から７年生、７年生から８年生に上がるにつれて徐々に上がっているという、そういう傾向があります。

伊藤協力委員

最後のページは７年生において、大泉桜学園から上がってきた子とあとはほかの小学校から入学してきた生徒と比較しているのですけれども、基本的には大泉桜学園の進学者との平均値の差というのは、ほかの小学校からの進学者もほとんどなかったというのが、この図の主な結果です。嫌な言葉は、仲間外れはちょっと離れている部分がありますけれども、あとは気持ちをわかってくれる人とか、クラスの協力を得るみたいなところはほとんど変わりませんでした。

部会長

非常に駆け足になってしまいました。Ｑ－Ｕのこの満足度調査においても比較的、子どもたちは学年進行で安定していています。６年から７年に上がるときの変化と５年から６年、７年から８年の変化が同じ。つまり、ほかのところですと６年から７年というのは学校がかわりますので、そこだけ値が違う動きをすることがあるのですが、どの学年でも同じように変化しているということが大事でして、小中一貫教育の特徴を示しています。どの学年でも同じように推移していることが見てとれるというのが一番大きいです。

満足度調査のほうも、今回やったアンケート調査と大体同じような傾向で出てきたと思います。何かご質問は、よろしいでしょうか。

事務局

長時間にわたりましてご協力いただき、ありがとうございました。今後の予定について資料

の５をごらんください。これは前回にもお示ししておりますけれども、日程の調整中だったところが確定しましたので、資料の５の中でお示しいたしました。次回は10月２日（木曜日）でございます。案件としては今回の続きということになります。ヒアリングの結果が、協議の中心になると思います。第８回が12月３日、第９回が２月17日となります。その間に１月に、ねりま小中一貫教育フォーラムということで教育委員会の事業がございますが、こちらにも本部会の報告も兼ねて行なってまいりたいと思っております。次回以降の検証の予定と、それから日程の確認をよろしくお願いしたいと思います。

それでは、本日の検証部会、ここで終了したいと思います。どうもありがとうございました。

（閉　会）